芸術文化学群 各専修のカリキュラム・ポリシー

演劇・ダンス専修

演劇・ダンス専修では演劇、ダンス、ミュージカル、舞台技術、アートプロデュースの領域を大きな柱に、複合的な教育を行います。同時に作品創作やワークショップ等の実践を通して経験を積むことを大切にしています。また、学生同士が仲間と切磋琢磨しながら力をつけていく環境も整っています。演劇界、ダンス界に多くの才能を輩出していますが、本専修では「舞台芸術」の力を信じ、地域文化の中核を担える人材も育成します。

①教育課程の編成

1. 本専修の学生に共通の基礎的な知識と教養を身につけるため、必修科目の「舞台芸術入門」では概論や歴史、「舞台芸術基礎 A」ではスタッフワーク、「舞台芸術基礎 B」では身体ワーク等の基本を学びます。これら必修科目は自身の適性と目標を発見することを促します。
   また「クリエーション入門」ではグループワークを通じて舞台創作の基本を学びます。
2. 「演劇」領域は、劇作家や演出家、俳優、ファシリテーター等、創作者に必要な科目が用意されています。「身体ワークス」や「上演実技」、また発声法を含むさまざまな演技メソッドを学ぶ「パフォーマンス演習」、京劇や狂言といった古典芸能の実技教育等、基礎から応用まで学ぶことができます。また、演劇論や演劇史等を学ぶことで、幅広い知識を身につけ、より実践科目の学びを深めることができます。
3. 「ダンス」領域は、歴史、作品研究等の理論科目をはじめ、「コンテポラリーダンス」、「クラシックバレエ」の実技科目を中心に、基礎から応用まで段階的に学ぶことができます。他にも「ポピュラー・ダンス」、「ジャズダンス」「日本舞踊」「即興ダンス」等多彩なダンス科目も用意され、また「舞踊教育法」等ダンス指導者を育成するための科目もあります。
   また、「演劇」「ダンス」領域にまたがる科目として「ミュージカル」教育があります。ソルフェージュ等の基礎から歌唱法を段階的に学び、演技法やダンス技術と合わせながら、ミュージカル俳優の育成をします。
4. 「舞台技術」領域は、「舞台芸術基礎 A」「技術スタッフ入門」「技術スタッフ基礎」で基本を学んだ後、照明・音響・舞台監督・舞台美術・衣裳等、徐々に専門性を深める科目へ進みスキルや知識を積み重ねます。「技術スタッフ応用」ではその学修成果で実際の舞台作品を作り上げ、自ら作品をプランニングできる創造的技術者の育成も目指しています。
5. 「アートプロデュース」領域は芸術教育を通したリーダー人材の育成を目指す領域です。プロデュースの基本から応用までを学び、舞台芸術を現実にするための方法を幅広く学びます。これは一般就職でも必要とされる能力の育成にも役立ちます。また、演劇やダンスの手法を応用したワークショップ等のファシリテーター育成を目指し、演劇やダンスを社会に活かす科目も用意されています。
6. これらの領域にて修得した知識や技術を実践に活かすものとして、プロの演出家や振付家が指導にあたる本格的な舞台創作発表の場として OPAL（桜美林大学パフォーミ

ングアーツ・レッスンズ）、また、「アートプロデュース」領域の実践編としての「コミュニティ･アートデザイン演習」を行います。

②学修方法・学修過程

1. １年次は必修科目を通して、舞台芸術を構成する様々な要素を、幅広く学ぶことからスタートします。
2. ２年次からは各自の志向、関心に従い徐々に専門性を深める授業を履修し、スキルや知識を積み重ねていくことができます。各領域を共に学ぶ相乗効果として、多彩な表現方法や技術を獲得することができます。
3. ３年次には「専攻演習」において１～２年次の学修成果を実践へと活かし、４年次には学修の集大成として研究発表としての自主公演や卒業論文等の成果物完成に取り組みます。
4. 地域の文化芸術に貢献する視点を持ち、アートプロデュースの観点からアウトリーチ活動やワークショップを実践的に学び、小学校や福祉施設等で行うさまざまなプログラムに参加することができます。
5. 実習室や劇場施設運営の一端を学生が担うことで、「表現の場」の運用について実践的に学びます。学生自らが創作活動をする機会も多く用意されています。
6. 古典から前衛、エンターテイメントから実験作、さらに国際的な作品も含め、優れた演劇・ダンス作品を選び、希望学生に観る機会を提供します。
7. 舞台芸術を学ぶ者は他ジャンルの芸術領域や哲学、社会学、心理学等人間と社会に対する理解が必要であり、他専修あるいは学内外の授業科目の中から選択して履修することができます。
8. グローバルな視野を持つ国際人育成を目的として、毎年、海外の演劇公演を鑑賞する短期研修を実施しています。

③学修成果の評価の在り方

（ア）学修成果は「卒業認定・学位授与の方針」に定められた項目と、学修方法・学修過程（カリキュラム・マップ等）により示された、科目が目標とする学修の到達度が学生自身にとってどの程度であったか示すものです。したがって学修成果は科目それぞれで設定されています。

（イ）学修成果の評価方法は、科目ごとのシラバスにおいて具体的に示します。また、成績評価を分かりやすく可視化し、厳格に評価します。

音楽専修

音楽専修では、ピアノ、声楽、器楽、コンピュータ音楽、ジャズ＆ポップス、ミュージカル、作曲、古楽等の各分野を、確たる芸術観と理念のもとに基礎から教育します。音楽的知識全般と各専門分野の技能の習得のみならず、社会においてそれらを応用する力を養うことを重要視しています。目標とする人物像は、社会人としての教養を併せ持つ音楽人です。

①教育課程の編成

音楽専修の「芸術専門科目」は、音楽基礎力を身に付ける「音楽入門」、「ソルフェージュⅠ・Ⅱ」、「西洋音楽史Ａ・Ｂ」の必修科目を含む各専門分野の実技、演習、講義の科目群によって構成しています。実技科目はピアノ、声楽、管弦打楽器、コンピュータ音楽、ジャズ＆ポップス、ミュージカル、作曲、和楽器、パイプオルガンまで多岐の分野にわたり、その多くは１年次から複数分野を重複して履修可能で、４年間を通じて段階的なレベルアップを目指します。

２年次以降の専修科目は、１年次に引き続き各専門分野の学びを深めるほか、チェンバロを用いて古楽の世界にも足を踏み入れることができます。

１～２年次の学修を踏まえ、３年次には「専攻演習Ⅰ・Ⅱ」そして４年次には「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」に取り組み、専門技能・知識の理解を深め、学びの集大成として卒業論文作成または演奏会の企画と実施を行うことが可能です。

②学修方法・学修過程

１～２年次の実技レッスンは各学期２科目まで履修することができ、そのほかに副科実技も設けられています。各自に適した実技を自ら選択することにより、状況的学修力が育まれ、主体性や自律性をはじめ、多角的な視点から従来の音楽の常識に問われない発想を生み出すことへつながります。１年次より４年間を通じて履修できる実技科目では、それぞれの専門分野における知識と技術力、芸術的感性と思考力等のプロフェッショナル力を獲得します。

「芸術専門科目」で多様に展開される科目群から、個々の求めるカリキュラムを自身で構築します。これによりオリジナリティのある音楽的感性を伴った専門性の獲得が可能となり、さらに主体性、責任感、自律性、観察・調査・分析する能力も身につきます。

「専攻演習Ⅰ・Ⅱ」と「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」では、それぞれの専門分野におけるプロフェッショナル力とプロデュース力を身につけます。また、これらの学習により、創造的な表現を通じたコミュニケーション力・協調性、情報収集能力等の能力向上にもつながります。

また、発表演奏会や依頼演奏を地域との結びつきの中で行うことで、日々の学修の成果を確認することができます。 これは世界や人間の多様性に目を見張り、共感する力、社会参加する力といった社会的包摂力を養います。

さらに、インターンシップを通じて音楽を支える仕事を体験することで、社会の中での仕事の役割を理解し、企画・構成する能力、プロデュース力の感性を磨き、卒業後の進路を考える上で役に立ちます。

グローバルな人材を育成するため、海外研修を毎年実施し、海外の芸術文化に触れ視野を広げます。異文化を体験することにより自国の社会問題への関心、批判的思考力の向上につながります。

③学修成果の評価の在り方

学修成果は「卒業認定・学位授与の方針」に定められた諸項目と、学修方法・学修過程（カリキュラム・マップ等）により示されています。

学修成果の評価方法は、科目ごとのシラバス（授業計画）において具体的に示されています。また、成績評価を分かりやすく可視化し、厳格に評価します。

ビジュアル・アーツ専修

近年、ビジュアル・アーツの世界は、従来のような美術、工芸、テキスタイル、デザイン、メディアアート、映像といったカテゴリーではくくれない、多様でハイブリッドな作品が生み出されています。また今日活躍するアーティストやデザイナーも一つのジャンルに収まらない人が増えています。ビジュアル・アーツ専修では、視覚芸術について幅広い視野と独自の視点を持ち、新たなビジュアル・アーツの世界を切り開く人材を育てることを目標としています。

①教育課程の編成

1）１年次には、共通の基礎的な知識と技能を身につけてもらうため「ビジュアル・アーツ入門」を必修とします。さらに２年次以降の専門科目を学ぶ上で必要な基礎知識を身につけることができるように「芸術スキルアップ科目」の選択科目として、ビジュアル・アーツ各分野の基礎的な科目を開講しています。
2）２年次以降の芸術専門科目は、美術、工芸、テキスタイル、デザイン、メディアアート、映像等各分野の講義、演習、実習科目から編成されており、各自が自由に選択することができます。
3）１～２年次の学修を踏まえ、３年次には、小人数指導による「専攻演習Ⅰ・Ⅱ」において専門知識の理解を深め、４年次には「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」に取り組み、学びの集大成とします。

②学修方法・学修過程

1）美術、工芸、テキスタイル、デザイン、メディアアート、映像等をコース別に学ぶのではなく、１年次には視覚芸術全体を把握し、各分野の基礎力を徹底的に育成します。一人一人が学修の成果を網目状に結びつけネットワーク化させることで、専門性を深化させ、個性的で独創的な芸術世界を構築します。
2）専修科目を基礎から応用へと体系的に学修するために、先修条件や履修順序を指定する場合があります。
3）授業やゼミで制作する品は、学内外の展示スペースで発表し、多くの人の目に触れられることを目指します。また卒業研究作品選抜展を学外のギャラリー及び展示会場等で開催し発表します。
4）専門性を深める学修のほかに、多様な関心や目的を達成するため、専修あるいは学群外の授業科目から履修することも可能です。
5）企業や制作現場におけるインターンシップや現場研修に参加し、実践的に学ぶと同時に卒業後の進路を考える機会を得ることができます。
6）グローバルな視野を持つ国際人育成を目的として、海外の芸術大学での短期研修を実施します。

③学修成果の評価の在り方

1）学修成果は「卒業認定・学位授与の方針」に定められた項目と、学修方法・学修過

程（カリキュラム・マップ等）により示された、科目が目標とする学修の到達度が学生自身にとってどの程度であったか示すものです。したがって学修成果は科目それぞれで設定されています。

２）学修成果の評価方法は、科目ごとのシラバスにおいて具体的に示します。また、成績評価を分かりやすく可視化し、厳格に評価します。